

す ず む じ

第 17 巻・第 1 号

(通 卷 101 号)

1968年3月

倉敷昆虫同好会

目 次

安江安宣：ニューヨーク自然科学博物館など	1
佐藤清明：むかしとんぼ（II）	11
榎本精二：トカラ列島採集品目録、蛾類	13
水野弘造：伯耆大山産天牛採集品目録（第Ⅱ報）	17
脇本 浩：臥牛山のカミキリムシ	20
山砥司朗：県内産ゴミムシの採集記録	23
那須 敏：西大寺産カミキリムシの記録について	25
赤枝一弘：岡山県未記録の蛾について	26
小野 洋・青野孝昭・宇野弘之： 近藤光宏・重井 博：岡山県のガロアムシについて	27
水野弘造：台湾蝶土産	29
おとしふみ	
脇本 浩：高梁市臥牛山のカミキリムシ類の記録	12
那須 敏：大山産カミキリムシ2種の記録	19
山砥司朗：備中産甲虫雑記 1	22
水野弘造：Maddester 雜言録 (6)	31

ニューヨーク自然科学博物館など ——アメリカ東部紀行と生態学的考察——

安 江 安 宣

(岡山大学農業生物研究所)

アメリカ東岸 New Jersey 州にある *Rutgers 大学創立 200年祭を記念して 1966年 8月26日から 9月 2 日まで新築なった同大学講堂において第 4 回国際生気象学会がはじめてアメリカで開催されることになった。私はこの学会が1956年創立されていらいの会員であるが、たまたまアメリカ気象学会より指名招待されて昆虫分科会（出席者約30名）に参加、わが倉敷市とも縁のふかい ヤサイゾウムシ *Listroderes costirostris obliquus* KLUG がしめしている世界における特異な不連続分布と Cf 型気候（温帯常雨気候）との関係について実験資料をまじえ、この蔬菜害虫の生態地理学的な研究発表をする機会にめぐまれた。

そのついでともうしては恐縮であるが、この絶好のチャンスを利用して私が今まで研究材料にえらんできた 2,3 の昆虫に関連し、アメリカとの共通種については彼我の標本を比較をしたり、また諸大学、博物館に保存されている東亜産昆虫標本の検索など当該官署のご好意によって、ほぼ 1か月のかぎられた時日しかなかったが、わりあいくわしく調査することができた。そこであまり専門にわたることはなるべくさけ紀行文の型式をとつて私がたずねた自然科学関係の研究機関の内容などを紹介しご参考に供したいとおもう。

学会のフィナーレから New York へ：

大学のある New Brunswick は New York の西南、52km、北緯40度に位置する人口わずか 4 万しかないしづかな田舎町である。ここから 10 キロ、南には湯川博士らがいた Princeton がある。こんどの国際会議はちょっとかわっていて、全参加会員が学生寮に全会期中合宿することになっており、私は西独 München 大学地球物理学者でこの学会幹事の K. Dirlal 博士とずっと同室だった。まことに好紳士で礼儀ただしく朝寝坊の私が起きだすころはまず大てい部屋にはいない。ある朝ふと気がついたのは私が眼をさますのを気づかって、廊下へでてから靴をはくほどの気のつかいようにはまったく恐縮のいたりだった。

参加全員 387 名、同伴夫人家族をいれると 450 名をこえたとおもわれる。1 週間もつづいたながい会期では途中帰国するものもあって最終日、夜の記念パーティーに出席したものは半分にもならなかった。けれども非常になごやかな気分がただよい、お酒がまわるにつれて互に話がはずんできて、君の国の東海道新幹線はすばらしいとほめてくれたのは振動生理の研究をしているというシカゴ大学の先生。ひだりとなりにすわった小柄なイギリスの物理学者 J. A. Crocket 博士はグラスゴー大学のことなので、スコットランド湖沼

*わが国では、ヘボン式 ローマ字で有名な J.C. Hepburn (1815-1911) の出身校、またストレプトマイシンの発見者で、1952年ノーベル賞をうけている S.A. Waksman 博士はこの大学農学部土壌微生物学教授である。

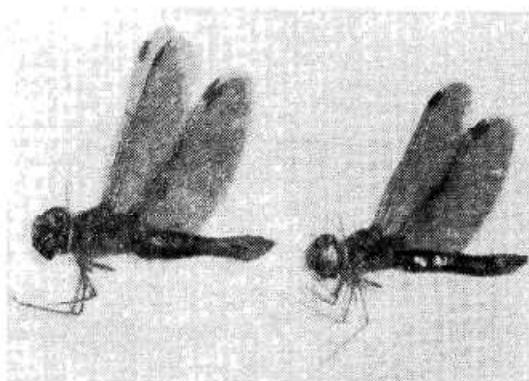
地方は近代岩登り発祥の土地ですね、私もふるい日本山岳会員だが……と問いかけると、彼はとたんにほんのりした顔をほころばせて、自分はいまでも教室の若いものとときおり山歩きをしているが、英國山岳会 The Alpine Club のメンバーではない由。

オランダにある学会本部の総幹事 S. W. Tromp 博士（地球物理学者）はこんどの会へは1家総出の出席で開会当日は美しい金髪のお嬢さんが受付係、先代のウイルヘルミナ女王とお顔がにている夫人は会計係をつとめていた。なにかのついでに彼が東印度生れときいていたので、新会長のとなりの席にいる博士に、Selamat malam! Tuan busar Tromp …… Ini pesta baik bagus!（今晩は！トロンプさん 今夜のデナーはすばらしい）とよびかけたら、彼いわく、父の勤務の関係でオランダ領時代スマトラの Medan でそだったので、君のマレー語はよくわかると ウィンをすすめながら南洋の想出をはなしあった。

なお昆虫分科会において私の発表日には京都大学農学部昆虫学教室からカナダ留学中の私の親しい友人、巖俊一博士がご夫妻でご出席されていたので、講演あととの質問のときなど早口の hearing に不慣れな私には大へん助った。発表したあとオーストラリアのある昆虫学者などから君の話は上手だとほめられたが、どうもお世辞だろう。今夜も察へとまる連中はいつまでも食堂でさわいでいたが、私は途中から抜けだして、駅前のタクシーをよび夜11時ごろの New York 行にのるため人かけもまばらになった New Brunswick 本駅（べつにダウン・タウン駅がある）の *ホームに立っていたら、例のバッグを肩にかついだ GI が、なんと、New York へいくにはどこで待っておればよいのかとたずねてきた。

夜もおそくなっただ Trenton どまりのローカル線では電車の乗客もすくなく私がのりこんだ車には黒人と2人のみ。このペンシルバニア鉄道はアメリカ東部地方ではもっとも歴史のふるい大幹線なのだが、急行もとまらない田舎駅ではキップ売場は8時でしめるから、列車内をまわってくる年配の専務車掌がキップをくれた。New York までわずか75セント。医薬品製造で名高いメルクの工場が線路わきにある Rahway あたりから、どやどやと数人の若い婦人連がのりこんできたので車内は急ににぎやかになった。どうも服装態度からみて素人ではなさそう。山手線などの終電車風景とにしている。さきごろ大規模な黒人暴動が報ぜられた Newark 市街のネオンの点滅が妙に印象にのこっているが、ここをすぎてまもなくハドソン川の河底トンネルにはいってペンシルバニア地下中央駅に着いたのはすでに12時ちかくだった。

宿をとった Henry Hudson Hotel は日本から直行してきた晩にも泊ったが、セント

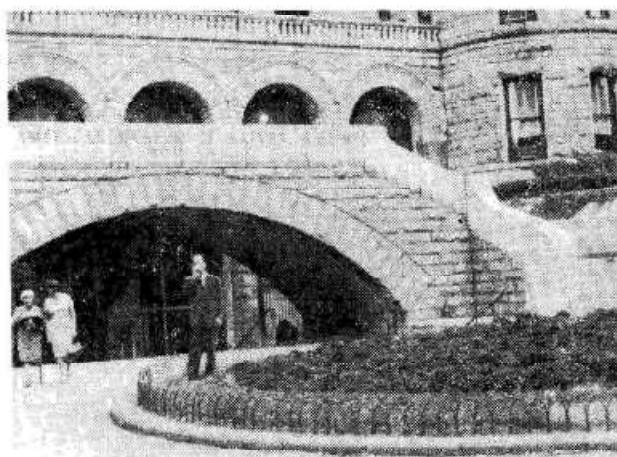


Rutgers 大学構内の池で捕えた小型（体長25ミリ）のトンボ、*Perithemis temnora* (SAY) ♂、米洲特産（米国立博物館昆虫部 O. S. Flint 博士同定）

*駅のプラットホームという語は通用せず、アメリカではトラック Track とよぶ。

ラルパーク公園の西南、ブロードウェイ57番街西入りにあり、クラスでいえば2流の下というところか。フロントをはじめ従業員はみな親切なのが気にいった。エレベーター係もチップを受けとらない。じつは当市ではしばらく滞在して自然科学博物館などで標本調査や古本あさりなどの予定をしていたので、日本を出発するまえに市内地図を照合しながら博物館にちかく、また旅行案内に名がのっているほどのホテルをあらかじめえらんだわけだ。わが国内の調査旅行でもおなじことだが、土地不案内のところで旅館代を節約するため町はずれの安宿にとまると、結局能率がおちて仕事にひびく。数年まえインドネシアの Djakarta でドル値約のためカンボンのなかにある純インドネシア式のホテルに宿をとりすっかり不便をかんじた苦がい経験もある。

Henry Hudson とは州観光局がおくってくれたパンフレットによると、まだアメリカ開拓時代にあった 1609 年オランダ西印度会社員だった彼がインディアンの住むハドソン川を始めてさかのぼって現在の州都 Albany に達した故事に由来するとみえるが、彼の銅像はいまマンハッタン島の北端ブロンクス区の河畔から想い出の川をながめながら立って



ニューヨーク自然博物館南側入口

れた。ドルはたっぷりもってはいたが、いわゆる市内名所見物などは興味がないのでいいしさになかった。摩天楼や自由の女神を海上からみるにはマンハッタン島を 3 時間で 1 周する Circle line の観光船がこのホテルにちかい西 43 番街の桟橋からわずか 2.75 ドルでみてまわれるコースもある。

うすぐもりの日曜日のひるさがり、カーネギーホールに代った新しい音楽堂のあるリンコーン広場をぬけ、ぶらりとハドソン川畔にそった River side park にでかけてみた。戦士記念碑わきのベンチで対岸 New Jersey のほうをながめていると太西洋がよいの巨船のあいだから赤い船体の観光船がゆっくりと小雨にけむるこの大きな川をさかのぼっていった。

ニューヨーク自然科学博物館：

The American Museum of Natural History

創立は 1865 年だからちょうど 100 年をへている。場所は New York のもっとも繁華な高層建築がならんでいるマンハッタン区の中央、セントラルパーク（面積 3.4 km² の長方形

いる。

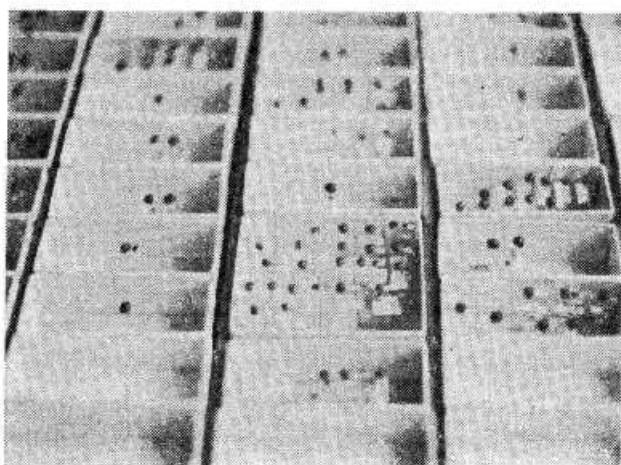
アメリカでは 9 月第 1 月曜日は労働祭の休日、つまり毎年かならずこの日の前後は連休となる気がきいた良い制度だ。もっとも第 2 次大戦まえインドネシアがまだオランダ領東印度とよばれていたころ、金曜日が祭日になると土曜の半どんもついでに公然と休日になった国もあった。これは余談になったがこの連休のおかげで私もホテルで久振りにゆっくり休養がと

だから上野公園のやく6倍)の西側に接し、西77番街から西81番街にわたる広大な敷地をしめ、正門は公園に面したところにある。地下鉄(IND line)ならば81番街駅でおりるとすぐ地下道で連絡しており、バスならば公園西側通りを南北に走っている赤10番線を利用する。博物館の外観はエルムの梢にかこまれたイギリスの古城をおもわせる石造5階建、規模の大きなことはWashingtonの国立科学博物館、Londonの大英博物館とならんで世界屈指といわれている。最上階は研究室となっていて一般人はオフリミット、4階以下が展示室で58室もある。入場は無料、月曜休館、研究室をたずねるときは正面受付に申して入室許可証をとくべつにもらわねばならない。私のバスはNo.43034であった。日曜祭日にぶつかると一般展示室のほうはどこの国でもおなじように家族づれが多くてまことに騒々しい。

さて連休あけの9月6日の朝、タクシーで博物館にむかい受付の電話をかりて昆虫部Department of Insects and Spidersへ連絡し、日本の九州大学安松教授から部長J.G.Rozen博士への紹介状とともにすでに標本検索の依頼状を日本からお送りしてある岡山大学の安江ですがと来意をつたえるとすぐOK。Rozen博士はおりあしく出張中であったが、窓ごとに公園をみおろす立派な部長室でまっていると秘書が甲虫類専攻



Dr. Patricia Vaurie
(Dept. Insects., Amer. Mus. Nat. Hist.)



ニューヨーク自然科学博物館所蔵の
世界各地のマダラテントウ類標本
(Genus *Epilachna*, Coccinellidae)

のMrs. Patricia Vaurie博士(Research Associate)を紹介してくれ、さっそく内庭に面した標本戸棚がぎっしりならんでいる彼女の研究室へとおされた。しばらく雑談したが、日本の若い学者では森本桂氏(農林省林試)、中条道崇(九大農昆)とよく文通しておられる由。

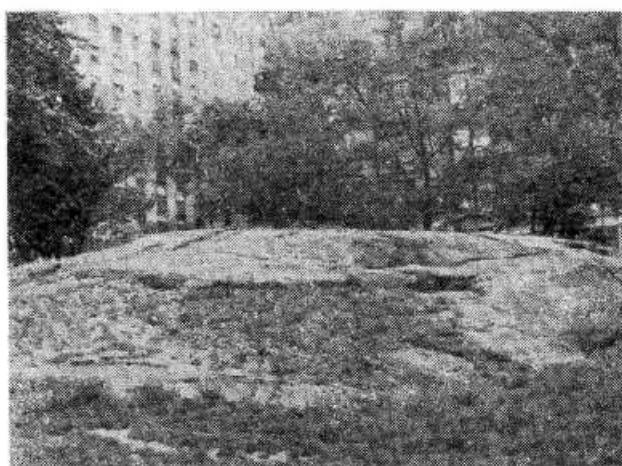
博士の最近における北米・中米産のゾウムシ科 Curculionidae、コガネムシ科 Scarabaeidaeに関する分類学上の業績(1~4)は私も農研にきている報告を拝見しているが、まことに浩瀚なものである。いま現実にお会いしてみれば、物静かで落着いて

た、しかも何をおねがいしても笑みをもって所用をしてくださるしとやかな女流学者であった。この昆虫部で調査した標本はヤサイゾウムシ属 (*Genus Listroderes*) ではアメリカ、南米、オーストラリア、南アフリカ産の標本類、マダラテントウ属 (*Genus Epilachna*) ではシナ、インド、フィリッピン、オーストラリア、ジャバ、ガダルカナル島産の標本類、それにミヤマアカネ類 (*Sympetrum pedemontanum*) の東亜産のものなどであった。

セントラル・パークの氷河遺跡：

研究のあいまには階下において陳列品をみたり、ひる休みにはウィークデーで人かけがさくない公園をぶらついた。アメリカ東北部の山野にはどこでも可愛らしいリスが多いがシマリスらしかった。この公園ではあちこちに餌箱が木の根元などにおいてある。わが国の1500メートル以下の低山級の山々をいまでも私はよくあるくが、現実に山のなかでリスをみたのは京都貴船山の三角点ちかくの林や岡山北部の奥山だけにすぎない。New Yorkにいるものは野生かエスケープしたものか私にはわからないが、とにかくとても愛嬌があるてよいものだ。公園の西南隅にちかいカエデやニレの林のなかのところどころには氷河遺跡である羊背岩（羊群岩）：Rundhöcker, Dressed rock の典型的な大岩塊があるのに気がついた。羊背岩とは氷河がゆるやかに流下していくときにその重さのため下の岩盤の背を滑らかにけずって生成したもので、日高山脈や日本アルプスにみられる窪谷 Karとともに氷河地形の特色とされている。先年私が参加した西 New Guinea 中央高地の予備調査においても最高峯 Soekarno 峯（旧名 Carstensz, 5030m）の山腹で氷河が後退していったあとにもみうけた。

ハイデルベルグ人などがあらわれた第4紀洪積世前期の時代、もっともきびしかったMindel氷期にはカナダの大部分とアメリカ東北部が部厚い大陸氷河におおわれていて、このNew Yorkはその時代の氷河地域の南限界であったことは地質学上すでによく知られたことである（5～7）。それにしてもこの世界最大の大都会の真ん中で氷河地形におめにかかるとはまったくうれしくなった。



Central Park 西南隅にみられる氷河遺跡の
羊背岩（羊群岩）

氷河といえば日本から Honolulu 経由、San Franciscoで米国内線の American Airline のゼット機にのりかえるとき、国際空港 AAL支社の Powell Pao さんとくにたのみ Sierra Nevada 山脈の最高峯 Mt. Whitney (4348.5m) が機上からながめられるようになると右の窓側 12F の座席をとることができた。おかげで万年雪をつけた美しい姿をはるか南の空にとらえることができたし、Rocky

山脈の高山のあちこちに残雪がみられたが、なにしろ1万メートルの高空からなので確かにとはいえないが、残雪ののこり具合からみてその昔このあたりに山岳氷河がかかっていたころできたカールの底にのこった雪らしかった。

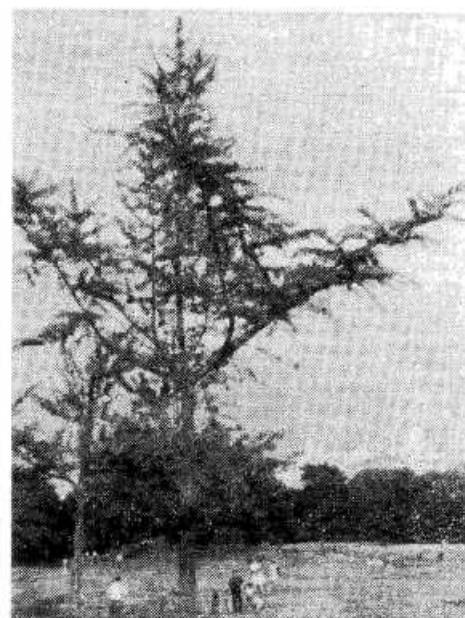
ちなみに氷河学 Gletscherkunde は昆虫の分布進化をまなぶものにとっては重要な補助学科のひとつになっている。たとえば最近では北米大陸におけるコガネムシを論じた Howden (1966) の研究などこの好例といえよう(8)。

日本とアメリカ東岸の類似性:

セントラル・パークの公園のなかにはイチョウ *Ginkgo biloba* L. がよくみられる。いずれも大木ではなく太くても胸高直径20cmにもみたないものが多いから、どうも第2次大戦後にわが国から移植したものではなかろうか? イチョウは Washington の国會議事堂 Capitol あたりの官庁街、とくに商務省まえの No. 14 street でも街路樹としてずっと植えられており直径15cmぐらい。この樹は周知のように中国原産で1科1属1種、ある説では12世紀ごろ日本へ渡来して、今日では固有種といつてもよいくらい国内すみずみまで生育している。この日支の郷土から遠くはなれた地球の裏側にあたるアメリカ東北部の太西洋岸の地方にも将来何10年、何100年かたてば、かって1912年 東京市から送られた Potomac 川畔のみごとな桜並木のように立派に新大陸へ根をおろすにちがいない。帰国してから念のためブリタニカをひいてみるとイチョウはイギリスやアメリカの5大湖以南では園芸品種としてもちいられているとかいてあった。

欧亜大陸東部と北米大陸東部地方は気候学上からいえばいわゆる東岸気候帶にぞくして元来気候がたがいによくにている。生物気候の立場ではシナ東部～日本地区とカナダをのぞいたアメリカ東岸太西洋岸地区はともに温帯常雨帶 (Köppen の気候型では Cf 型, Troll & Paffen の気候型では III₈ ~ IV₇ 型) の気候であるから四季のべつがあって非常に温かなところだ。したがって両者の生物相の相似はもちろんのこと、西欧を起源とする近代文明のアジア・アメリカ両大陸における発展の基盤となったところが、奇しくも全くおなじ気候型の新天地であった事実はまことに学問的にも興味がある現象といわねばならない。

ところで驚いたことには両大陸東岸の類似性については未だ自然科学が幼稚な段階にあつたいまから2世紀ちかい昔、有名な Benjamin Franklin (1706-1790) が創設した Philadelphia の American Philosophical Society の紀要第1巻 (1771) の巻頭にのせてある序文にこの事実を明記してあることを東京都立大学古野教授が丸善の「学鑑」58巻



Central Parkのイチョウ *Ginkgo biloba*

に紹介している(10)。いま関係部分を氏の抄訳から転載させてもらうと『…旅行者たちの報告を信頼するならば、おなじ緯度にあるこの国はシナまたはアジアの東側を形成している地域に土壤、気候、気温、風、天候それに自然の生産がきわめて似ている。ところがこの大陸そのものの東部と西部とは非常にちがっている。…』。この注目すべき序文について古野教授はアメリカ独立宣言に先立つこと5年、わが徳川時代の明和8年にかかれたこの文章は Franklin 自身の執筆ではないかと推察されているが確かな著者はいまのところわからないらしい。

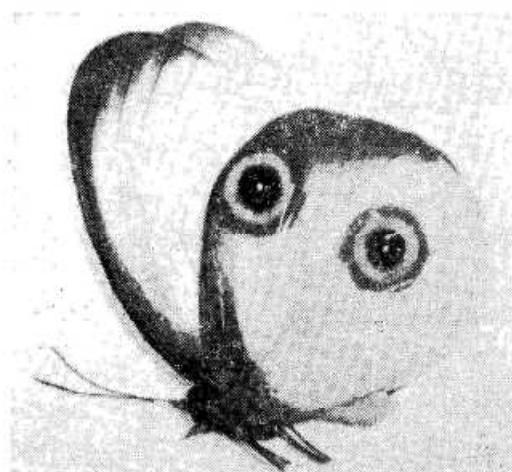
いまひとつふるい事例をあげよう。上記の序文から90年ほどあと、C. Darwin と親交のあったアメリカ有数の植物学者 Asa Gray (1810—1888) が“種の起源”初版 (1859) の出版される前年にあたる1858年12月14日、C. Wright のひきいる北太平洋探検隊がもちかえった日本産植物の腊葉標本をくわしく検討した結果、“A note of the vegetation of Japan in its relations to that of the Northern Temperate Zone Generally”と題する論文を the American Academy of Arts and Science に投稿し、日本の植物相はアメリカの Mississippi 以東の植物とたいへんよくにていることを指摘した(11)。

私がこんど学会で発表したヤサイゾウムシが彼我両国において近年しめしている地理的分布の類似性も所せんこれとまったくおなじ考え方にもとづくものであるし、農業害虫がきびしい検疫網をくぐってアメリカに伝播した有名な事例をいまひとつあげよう。日本で北海道から九州までマメ、ブドウ、苗木などを喰害しているマメコガネ *Popillia japonica* NEWMAN が偶然なにかアメリカ向きの輸出貨物について侵入したのであろうともわれるが New Jersey 州の私がいった New Brunswick の町の南方やく40キロ、Delaware 川をはさんで Philadelphia と相対している Burlington のある村に1916年突然わざか10匹ばかり発見されて大騒ぎとなった。当局必死の防除工作も効果なく年々その被害範囲がひろがって、いまでは Mississippi 以東のアメリカ東北部地方の諸州では庭園、果樹園の大害虫となって Japanese beetle という有難くない名がついてしまった。これなどもマメコガネの移住先がたまたま彼らのお国とよくにた気候のところだったので現在にいたるまで50年間も盛んに繁殖しているのであって、もしかりに日本から直接アリゾナの砂漠などについたとすれば、おそらく自然消滅していたにまちがいない。

自然科学博物館一般展示室：

正門玄関からはいると階段をふんで2階になるが、ここにはアフリカ、東南アジアの哺乳類、世界の鳥類、モンタナ州の古代人の陳列がある。3階では北米の鳥類、靈長類、爬虫類、世界の昆虫類など、4階には恐龍類、原始哺乳類、魚類化石、鉱物、宝石の陳列と附属図書室があり、ここからエレベーターで1階にさがればアメリカインディアン、人類の生活、北米の森林植物、一般無脊椎動物、Sanford 記念鳥類、Theodore Roosevelt 記念室、エスキモー、プラネットリウム、講堂などがあり、売店の横は南側西77番街への出口となる。

昆虫類の展示ではたとえば New Guinea 産の蝶類は、ゴクラクトリバネアゲハ *Troides (Schoenbergia) paradiscus paradiscus* STAUD.、ミイロタイマイ *Graphium weiskei weiskei* RIBBE などの系統分化を地図と対照しながら、わかりやすい説明がな



New Guineaのウスイロメダマチョウ, *Terenaris catops westwoodi* STAUDINGER (開張80mm) (ワモンチョウ科 Amathusiidae), 1968年12月16日 Nabire にて安江採集

されている。前者の蝶については1963年12月下旬、私は New Guinea 北岸の飛行基地 Nabire の宿舎に滞在中 *Hibiscus* の花にとまっているのを部屋の窓越しにみつけたので、大急ぎでネットをひっつかんで捕えた記憶がある。惜しいことにこれは♀だったが、♀は翅が金緑色の大アゲハであるがそれなかった。♀はそれほど美しくなく黒色の後翅に若干赤色紋がついており、台湾の山地にいるアケボノアゲハ *Atrophaneura horishana* MATSUMURA にやや似たかんじだ。アケボノアゲハは1939年のやはり12月、砂金の産地で知られている台湾東海岸のタツキリ渓谷の奥のある部落にうえてあった *Poinsettia* でつかまえたこ

とがある。またミイロタイマイは1964年2月、New Guinea の1850mの山中で沢山採集した。このニューヨークの自然科学博物館に展示してある New Guinea 産の蝶は平地の熱帯雨林にいるものが多い。1963~1964年にわたっておこなわれた京都大学西イリアン学術探検予備隊が採集した中央高地産蝶類はその1匹ごとに私の採集の想出が走馬灯のようにうかんでくる標本だが、現在すべて九州大学白水教授のもとでくわしく研究されており、ここに陳列してある標本とくらべて、どんな蝶類目録ができあがるものか楽しみにしているわけだ。

極楽鳥, *Birds of Paradise*:

鳥類室へまわるとここはいわゆる生態陳列の方法がとられており、この点は哺乳類も同様、展示にもちいられている植物はすべて原地産の植物をもちい、バックの風景も専属画家が現地で画いた *油絵をもとにしていること。

New Guinea 特産の極楽鳥は C. Darwin と同時に生物進化学説をとなえ、また生物地理ではワーレス線で名高い A.R. Wallace (1823~1913) が名著 “マレー群島” (1869) 第38章のなかで始めて “神の鳥” といわれていた此の鳥の生態をくわしく当時の学界に紹介した。この館の展示をみると鳥が群れとまっている近景は明らかに西ニューギニア中央高地の 3400m の高度にある Habema 湖であり、遠景には New Guinea 第3の高峯 Wilhelmina Top (現インドネシア名では Puntjak Trikora) 4750m の氷河をいただく山容がえがいてある。またこの資料は歐洲の天地の雲行きがあやしくなりはじめた 1938~1939年に、本館後援のもとにおこなわれた アーチボルド 蘭領ニューギニア探検隊(12) がもちかえったもので、おそらく極楽鳥は当時の副隊長であり鳥類学者である A.L. Rand 博士らが打ちおとしたものであらうし、そえてある草木は L.J. Brass 博士らが採集した標本であろう(13)。

*この原画の油絵は公園の東側にある The Explorers Club の壁にすべてかけてある。

New Guinea の象徴といわれるこの Birds of Paradise (インドネシア語では Tjenderawasih) のうちでも羽毛が優美な *Paradisea apoda*, *P. minor* など Paradisinae 亜科の鳥は元来1000m以下の熱帯降雨林を生活の場としており、高度1500m以上の山地にはいると個体数は非常に稀れとなる。極楽鳥の分化を系統的にしらべた E. Mayr (1963) の研究(14)によても中央山脈地帯ではこの亜科は空白で棲息地とはなっておらず、高地には尾長のカラスみたいでこれが極楽鳥かとおもわれるような黒色系の Astrapiinae 亜科のものとおきかわっており、つまり両亜科の極楽鳥は山地と平地に棲みわけていることになる(15)。

事実私が中央高地西端にある1750mの高度の Wissel 湖 (Paniai湖) にのぞむ Enarotali を基点として平均高度4000mの Nassau 山脈の北側にそい東へほど300Kmほどの地点にある Beoga (高度 1850m) まで調査したおりにも極楽鳥をみたのはただ1回だけ、同行した Begol 動物博物館採集官の Bocadi 君も打落すのにまったく苦心していた。美しい種類の極楽鳥の羽毛は19世紀中葉から今世紀始めにかけては歐洲の貴婦人連の装飾用として盛んに輸出され、一説によると1870～1924年までのあいだに実際に10万羽以上のものが New guinea から流れだしたといわれる。ついに当時の蘭領東印度総督府は自然保護の立場から1931年に学術研究以外は捕獲と輸出を禁止し、違反者には罰金を課することになった。いまのインドネシア政府も當利を目的にとることは表向きには禁止しているが、シャカルタの土産物店ではときには店頭にもでている。その多くはキイロゴクラクチョウ *Paradisea minor* である。私の家でも戦前床の間においてあったが戦災でうしなった。動物分類学からいえば ゴクラクチョウ科 *Paradiseidae* はカラス科にごく近縁であるから姿態の美しさに似合はず鳴声はカラスに似ていたように記憶している。

大パンダ, Giant panda :

この博物館で私がいまひとつ強い印象をうけたのは天下の奇獣アライグマ科 Procyonidae にぞくする Giant panda (*Ailouropoda melanoleucus*) の生態陳列の標本と Roosevelt 記念室であった。アメリカ第26代大統領 Theodore Roosevelt (1858-1919) は日露戦争の調停をおこなって日本とも関係の浅くない政治家であったが、退官後はアフリカの猛獣狩に熱中して "African game trails" (1910) などの著書もかいている。この父の感化をうけた彼の2人の子息も世界の僻地へ珍らしい動物を求めて歩きまわったが、そのなかでもめざましい功績はなんといっても中国大陸の奥ふかく四川省にしか棲まないといわれていた Giant panda を白人としてはじめて射止めたことであろう。

クマにちかいこの動物はチベット在住のある仏人宣教師が1869年にわずか1枚の毛皮をはじめてヨーロッパへもちかえって以来、幻しの奇獣としてなかなか伝説化されていたもので、ちょうど今日でいえばヒマラヤの雪男とおなじく動物学界の大きな謎であった。そこで T. Roosevelt, Jr. および Kermit Roosevelt の両兄弟は半ヶ年にわたる苦難の遠征のすえ、1929年4月13日にシナ本部最高峯である貢嘎山(クンカーシャン), Minya Konka (7590m) の南方100Km, 揚子江支流の残雪に被われた竹藪のなかで見事に Giant panda をうちとめた。もちろんこのことは当時世界の大ニュースとなり、たしか東京朝日も彼らの特約記事を第1面に連載したほどであった。いま中共時代になってからも名獸とし

て保護されており切手や絵葉書につかわれている。私は敗戦色すでに濃くなっていた昭和19年(1944)に本の書名は前から知っていたのだが、彼らの探検記“Trailing the Giant Panda”(1929)を神田の古本屋の棚でみつけたときは、われながら夢ではないかとおもった。その上たまたまこの本を研究室の机上においていたので自宅の戦災でも運よく助かり今日まで座右においているがそれだけに、今このNew Yorkの博物館で彼ら父子3人の遺品のかずかずを眼のまえにおいて、まことに感じいったのであった。

なお参考のためしるすとニューヨーク自然科学博物館から発行されている逐次刊行物としては Bulletin of the American Museum of Natural History [岡大農研所蔵 Vol. 38(1918)–Vol. 132(1966)], American Museum Novitatus [岡大農研所蔵 No. 1 (1921)–No. 2265(1966)], Natural History [岡山県立総合文化センター所蔵 Vol. 60 (1951)より]がある。前2種は純学術専門誌、最後の雑誌は月刊で普及用の博物雑誌である。

参考文献

- (1) Vaurie, P. (1951) : Revision of the Genus *Calendra* (Formerly *Sphenophorus*) in the United States and Mexico (Coleoptera, Curculionidae). Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., Vol. 98, 29–186.
- (2) ——— (1955) : A Revision of the Genus *Trox* in North America (Coleoptera, Scarabaeidae). ibid. Vol. 106, 1–90.
- (3) ——— (1958) : A Revision of the Genus *Diplotaxis* (Coleoptera, Scarabaeidae, Melolonthinae). ibid. Vol. 115, 263–396.
- (4) ——— (1961) : A Review of the Jamaican Species of the Genus *Exophthalmus* (Coleoptera, Curculionidae, Otiorhynchinae). Amer. Mus. Nov., No. 2062, 41 pp.
- (5) 井尻正二, 漢正雄(1957) : 地球の歴史, (岩波新書版) 217頁。
- (6) Flint, R.F. (1957) : Glacial and Pleistocene geology. New York, 553 pp.
- (7) Zeuner, F.E. (1959) : The Pleistocene Period. London, 447 pp.
- (8) Howden, H.F. (1966) : Some possible effects of the Pleistocene on the Distributions of North American Scarabaeidae (Coleoptera). Canad. Ent., Vol. 98, 1177–1190.
- (9) Transact. Amer. Philos. Soc. Vol. 1, No. 1, Preface.
- (10) 古野清人(1961) : アメリカ科学の精神—その1つの古記録, 学證. 58巻5号. 4–9.
- (11) Dupree, A.H. (1959) : The first Darwinian debate in America : Gray versus Agassiz. Daedales; J. Amer. Acad. Arts & Sci. (Summer issue), 560–569.
- (12) Archibald, R. (1941) : Unknown New Guinea. Nat. Geogr. Mag. Vol. 79, 315–344 (1941年安江全訳, 1963年京大探検部刊行).
- (13) Brass, L.J. (1941) : The 1938–1939 expedition to the snow mountains, Netherlands New Guinea. J. Arnold Arb., Vol. 22, 271–342.
- (14) Mayr, E. (1963) : Animal species and evolution. Cambridge, 797pp.
- (15) Iredale, T. (1950) : Birds of Paradise and Bower Birds. Melbourne.

むかしとんぼ

佐藤 清明

(岡山県浅口郡里庄町里見)

(2) ガロアムシの記

大正4年(1915)8月26日、ガロア氏(EDME GALLOIS)が採集したためにガロアムシという。ガロア氏は永く東京のフランス公使館につとめて通訳を担当する傍、昆虫採集に熱中していたが、日光中禅寺の湖畔に於て成体♀を1疋得、翌年9月27日に更に成体♀1疋と歩蛹1疋を得て、これが直翅類であることは判ったけれども何科のものであるかも知れなかった。そこで心あたりの人に聞き廻っていたところ、キング(J.L. King)という昆虫学者がこれをきき、恐らくアメリカ産の珍虫 *Gnyloblatta* 属であろうと当りをつけて中禅寺へ再査に出かけた。そして大正11年(1922)9月15日にめでたく成体♀、歩蛹をそれぞれ1疋、また翌年5月11日に歩蛹2を得てこの類の専門家のコーデル氏(A.N. CAUDELL)に見せた。氏はこれを所属新種として、すなわち *Galloisia nippensis* CAUDELL et KING を命名したのであった。(Proc. Entomol. Soc. Warh., Vol. 26, No. 3, pp. 53-60, 1924)

ところがこの属名 *Galloisia* はすでに甲虫に対して用いられておるので (*Galloisia* HUSTACHE, Bull. Mus. Paris. 1920, p. 493), 改めてコーデル氏は *Galloisiana* (Proc. Ent. Soc. Warh., Vol. 26, No. 4, p. 92, 1924) と命名したのであった。その後、河田党氏は秩父で、山本厚氏は高尾山で、鹿島忠雄氏は北アルプスで、湯浅啓温氏は上高地で、湯浅八郎氏は京都貴船山で得た。

大正14年(1925)6月、石井悌氏は長崎市岩屋山で類似の昆虫を得たが、同行していたイタリアの昆虫学者シルベストリ(F. SILVESTRI)にこの標本を与えて研究を托したところ氏は *Grylloblatta (Ishiana) notabilis* SILVESTRI (Boll. Labor. Zool. gen. e agr., Portici, Vol. 20, pp. 113-118, 1927) とした。これがイシイムシで今は亜属を昇格して属としておる。ガロアムシは小さな複眼があるがイシイムシは明らかに複眼がない。この類の第1種がとれたのはアメリカで *Grylloblatta campodeiformis* WALKER, Canad. Entomol., Vol. 46, pp. 93-99, 1914, 本種は尾毛が9節、ガロアムシは尾毛8節である。ガロアムシは無翅無変態で原始的特徴を具えた直翅類でシロアリの等翅目、ハサミムシの革翅目、シロアリモドキの紡脚目にも類似点があり、直翅目を2分して歩行亜目、跳躍亜目とするときガロアムシは跗節が5で、走る習性は前者で、産卵管の長く突出した点は後者で、よりて中間の欠翅亜目(コオロギモドキ亜目 *Grylloblattoidea* BRUS et MELANDER, 1915, 又は *Notoptera* CRAMPTON, 1915, 後者の方が発表が半年早い)を立てておる。

さて岡山県での記録は高知女子大学の石川重治郎氏が昭和29年(1954)5月5日に阿哲台の鐘乳穴で得たのが最初である。実はこれは私が御案内したのであったが、ズボラな私はその実物を拝まずにしてしまったので、今は記録をたどる他に方法がない。記録には *Grylloblatta* sp. とある。(高知女子大学紀要, 第4卷第1号, p. 18, 1955)

そこで翌年夏、漸やく目ざめてこれを捕えんものと、小野、青野、近藤の諸兄に報じて

上房台の鐘乳穴へ行って頂いたことがあった。当時、進駐軍払い下げの8人用テントを手に入れたので、これを持って行き洞口で数日宿營してガロアムシ採集を頑張ったが、その時に石川氏の採集助手をした土地の青年が、これがガロアですと洞内に沢山いる虫を無難作に指したので一同は大喜び、私も鬼の首をとった心地で傑作にも管瓶へ入れて喜んだ。が、どうも怪しく、急ぎ帰郷して図鑑を見れば全くのおどろき、実物は似てもつかぬ代物である。コレハチガウ、ハネノナイコオロギニニタモノダと早速電報でテント村へ知らそうとしたが、何分にも人里はなれた洞口のこととて、カナチアナマエ、テントとして頼信紙に認めたものである。それでもこの電報は安着し、一行はがっかりしたという昔話を思い出して、このたびガロアムシを確認したことは喜びにたえない。

ローマは1日にして成らずというが、ガロア氏の中禅寺から小野兄などの今回の発見までの、うよ曲折はまことに感無量である。

= おとしふみ =

高梁市臥牛山のカミキリムシ類の記録

筆者は、高梁市臥牛山において、次のようなカミキリムシを記録したので、報告しておきます。種々御教示いただいた青野氏に厚く御礼申し上げます。

- 1) *Anoploderomorpha excavata* BATES ミヤマクロハナカミキリ
1ex., 15.VI.1967. クリの花上より採集された。
- 2) *Kanekoa azumensis* MATSUSHITA et TAMANUKI ミヤマルリハナカミキリ
1ex., 5.V.1967, 1ex., 11.V.1967. いずれも頂上付近のカエデの花上から採集された。
- 3) *Leptura xanthoma* BATES カタキハナカミキリ
1ex., 20.V.1967. 頂上付近のタラヨウの花上から採集された。
- 4) *Xylotrechus grayii* WHITE ムネマグラトラカミキリ
1ex., 14.V.1967, 1ex., 25.V.1967, 4exs., 31.V.1967, 1ex., 27.VI.1967. ふいご峠付近の倒木上から採集された。5月下旬に多く出現するものと思う。なお、1966年5月28日に高梁市津川町今津の木野山駅前のキリの木から4頭採集している。
- 5) *Xylotrechus laetus* MATSUSHITA ツマルトラカミキリ
2exs., 11.V.1967. 頂上付近のカエデの花上から採集された。
- 6) *Rhaphuma xenisca* BATES ホソトラカミキリ
3exs., 15.VI.1967, 5exs., 27.VI.1967, 1ex., 6.VII.1967. 頂上付近でも採集されたが、ふいご峠付近のモミの倒木から採集したもののが多かった。
- 7) *Rhaphuma yedoensis* KANO トウキョウトラカミキリ
1ex., 25.IV.1967. 頂上付近で採集された。
- 8) *Monochamus grandis* WATERHOUSE ヒゲナガカミキリ
1♂, 23.VII.1967. ふいご峠付近のモミの倒木上から採集された。赤枝氏が1956年8月10日に1♀を採集 (Vol. 14, No. 4, p. 12) されているので、臥牛山より1♀が記録されたわけである。

(脇本 浩)

トカラ列島採集品目録

一 蛾類 一

槇 本 精 二

(倉敷市児島林790)

会員秋山博志が1965年7月から8月にトカラ列島諏訪之瀬島を主とし、悪石島・奄美大島で採集した蛾類の調査を許され、早くも二年が過ぎようとしている。気安く請け合って見たものの日頃の不勉強がたたり四苦八苦、どうにかまとめ上げたのが下記の目録である。

殺虫剤の関係と、三角紙を節約したおかげでミクロの大部分は個体の損傷、鱗粉の脱落がはげしく現在の私の知識では分類不能であったことをお詫びする。貴重な資料を研究させて下さった秋山氏に感謝します。標本は一部展翅の上倉敷昆虫館に展示されており、未展翅品は私が保管している。

SPHINGIDAE スズメガ科

1. *Herse convolvulii* LINNAEUS エビガラスズメ
22. VII. '65; 1. VIII. '65, 諏訪之瀬島; 14. VIII. '65, 悪石島
2. *Psilogramma increta* WALKER シモフリスズメ
25. VII. '65; 28. VII. '65; 29. VII. '65; 30. VII. '65, 諏訪之瀬島
3. *Macroglossum stellatarum* LINNAEUS ホシホウジャク
16. VIII. '65; 17. VIII. '65, 奄美大島名瀬
4. *Macroglossum fritzei* ROTHSCILD et JORDAN フリツエホウジャク
2 exs., 23. VII. '65; 24. VII. '65; 29. VII. '65; 30. VII. '65; 7. VIII. '65; 8. VIII. '65, 諏訪之瀬島
5. *Theretra alecto* LINNAEUS シタベニスズメ
3 exs., 22. VII. '65; 24. VII. '65; 2 exs., 25. VII. '65; 27. VII. '65; 28. VII. '65,
諏訪之瀬島

ARCTIIDAE ヒトリガ科

Nyctemerinae モンシロモドキ亜科

1. *Nyctemera plagifera* WALKER モンシロモドキ
27. VII. '65, 諏訪之瀬島

NOCTUIDAE ヤガ科

Noctuinae モンヤガ亜科

1. *Agrotis fucosa* BUTLER カブラヤガ

[すずむし, 第17卷, 第1号, 13~16頁, 1968年3月]

8. VII. '65, 諏訪之瀬島

Amphipyrinae カラスヨトウ亜科

2. *Prodenia litura* FABRICIUS ハスモンヨトウ

30. VII. '65, 諏訪之瀬島

3. *Callopistria repleta* WALKER マダラツマキリヨトウ

23. VII. '65, 諏訪之瀬島

4. *Callopistria aethiops* BUTLER アミメツマキリヨトウ

26. VII. '65, 諏訪之瀬島

Acontiinae コヤガ亜科

5. *Maliattha signifera* WALKER ヒメネジロコヤガ

22. VII. '65; 25. VII. '65, 諏訪之瀬島; 13. VIII. '65, 惠石島

6. *Xanthodes transversa* GUENÉE フタトガリコヤガ

13. VIII. '65, 惠石島

Catocalinae シタバガ亜科

7. *Erebis ephesperis laetitia* BUTLER オオトモエ

2. VII. '65, 諏訪之瀬島; 14. VIII. '65, 惠石島

8. *Parallelia curvata* LEECH オキナワアシブトクチバ

2. VIII. '65; 7. VIII. '65, 諏訪之瀬島

9. *Mocis undata undata* FABRICIUS オオウンモンクチバ

8. VIII. '65, 諏訪之瀬島

10. *Chalciope geometrica orientalis* WARREN ナカグロクチバ

30. VII. '65; 31. VII. '65; 8. VIII. '65, 諏訪之瀬島; 13. VIII. '65, 惠石島

Hypeninae アツバ亜科

11. *Dichromia ella* BUTLER タイワンキシタアツバ

7. VIII. '65, 諏訪之瀬島

12. *Dichromia orosia* CRAMER モンクロキシタアツバ

7. VIII. '65, 諏訪之瀬島

LIMANTRIIDAE ドクガ科

1. *Euproctis pulverea* LEECH f. *kurosawai* INOUE ゴマフリドクガ (ナカグロキドクガ)

22. VII. '65; 28. VII. '65; 1. VIII. '65; 6. VIII. '65, 諏訪之瀬島

GEOMETRIDAE シャクガ科

Geometrinae アオシャク亜科

1. *Comibaena* (s.str.) *procumbaria* PRYER ヨツモンマエジロアオシャク
23. VII. '65; 1. VIII. '65, 諏訪之瀬島
 2. *Comibaena* (s.str.) *obsoletearia* LEECH ヨツテンアオシャク
22. VII. '65, 諏訪之瀬島; 13. VIII. '65; 14. VIII. '65, 悪石島
 3. *Comostola subtiliaria nympha* BUTLER コヨツメアオシャク
28. VII. '65; 29. VII. '65, 諏訪之瀬島
Sterrhinae ヒメシャク亜科
 4. *Scopula coniaria* LEECH シモフリシロヒメシャク
3exs., 22. VII. '65; 23. VII. '65; 3exs., 26. VII. '65; 29. VII. '65; 30. VII. '65,
諏訪之瀬島
Ennominae エタシャク亜科
 5. *Carecomotis replusaria* WALKER フトスジエタシャク
2exs., 29. VII. '65; 30. VII. '65; 2. VIII. '65; 6. VIII. '65, 諏訪之瀬島
 6. *Racotis boarmiaria japonica* INOUE ホシミスジエタシャク
31. VII. '65, 諏訪之瀬島
- PYRALIDIDAE** メイガ科
- Endotrichinae トガリメイガ亜科
1. *Endotricha portialis* WALKER キベリトガリメイガ
25. VII. '65, 諏訪之瀬島
Pyralidinae シマメイガ亜科
 2. *Hypsopygia mauritialis* BOISDUVAL モモイロシマメイガ
25. VII. '65; 26. VII. '65; 29. VII. '65, 諏訪之瀬島
 3. *Orthopygia glaucinalis* LINNAEUS フタスジシマメイガ
28. VII. '65, 訪訪之瀬島
 4. *Orthopygia nannodes* BUTLER ツマアカシマメイガ
22. VII. '65, 諏訪之瀬島
 5. *Herculia japonica* WARREN ウストビシマメイガ
25. VII. '65, 諏訪之瀬島
 6. *Herculia pelasgalis* WALKER アカシマメイガ
3exs., 25. VII. '65; 1. VIII. '65, 諏訪之瀬島
 7. *Bostra indicator* WALKER ツマグロシマメイガ
30. VII. '65, 諏訪之瀬島
Pyraustinae ノメイガ亜科
 8. *Cirrhochrista brizoalis* WALKER モンキシロノメイガ
30. VII. '65; 31. VII. '65; 6. VIII. '65; 7. VIII. '65, 諏訪之瀬島

9. *Bradina admixtalis* WALKER ウスグロノメイガ
22. VII. '65; 11exs., 23. VII. '65; 7exs., 25. VII. '65; 4exs., 26. VII. '65; 29. VII. '65; 2exs., 30. VII. '65; 31. VII. '65; 2exs., 1. VIII. '65. 諏訪之瀬島
10. *Diathrausta brevifascialis* WILEMAN シロテンノメイガ
2exs., 23. VII. '65, 諏訪之瀬島
11. *Hymenia recurvalis* FABRICIUS シロオビノメイガ
23. VII. '65; 2exs., 28. VII. '65; 29. VII. '65; 30. VII. '65; 31. VII. '65,
諏訪之瀬島
12. *Agroterta nemoralis* SCOPOLI ウスムラサキノメイガ
30. VII. '65, 諏訪之瀬島
13. *Cnaphalocrocis medinalis* GUENÉE コブノメイガ
7. VIII. '65, 諏訪之瀬島
14. *Marasmia venilialis* WALKER ハカジモドキノメイガ
28. VII. '65, 諏訪之瀬島
15. *Hedylepta tristrialis* BREMER シロアシクロノメイガ
30. VII. '65, 諏訪之瀬島
16. *Hedylepta similis* MOORE クロミスジノメイガ
2exs., 28. VII. '65; 6. VIII. '65, 諏訪之瀬島
17. *Hedylepta indicata* FABRICIUS マエウスキノメイガ
22. VII. '65; 26. VII. '65; 31. VII. '65, 諏訪之瀬島
18. *Metasia coniotalis* HAMPSON ハイイロホソバノメイガ
2exs., 29. VII. '65; 2exs., 30. VII. '65; 2exs., 31. VII. '65; 1. VIII. '65, 諏訪
之瀬島
19. *Goniorynchus butyrosa* BUTLER クロヘリキノメイガ
1. VIII. '65, 諏訪之瀬島
20. *Syllepte luctuosalis zelleri* BREMER モンキクロノメイガ
28. VII. '65; 31. VII. '65, 諏訪之瀬島
21. *Glyphodes pryeri* BUTLER スカシノメイガ
6. VIII. '65, 諏訪之瀬島

OLETHRUTIDAE ヒメハマキガ科

1. *Laspeyresia koenigiana* FABRICIUS ベニモンヒメハマキ
23. VII. '65, 諏訪之瀬島

TORTRICIDAE ハマキガ科

1. *Adoxophyes orana* FISCHER v. ROSLERSTAMM コカクモンハマキ
25. VII. '65, 諏訪之瀬島

伯耆大山産天牛採集品目録（第Ⅱ報）*

水野 弘造

1967年6月4～5日、前年と同じコースで伯耆大山に採集を試みた。天気は4日は晴、5日は曇で両日ともかなり蒸暑かった。同行者は京大の倉田道夫教授と岡本宏義氏、三人で計62種のカミキリを採集したが、前年（6月17～18日）*より約2週間早いため、前年は採れなかった種が採れた（ヘリウスハナ、アカイロニセハムシハナ、アカネ、タカオメダカ、プロイニング etc.）ほか、前年は少なかった種が多数採れたり（テツイロハナ、チビコブ）、前年採れた種が本年は採れなかったり（ヨコヤマトラ、ムネマダラトラ、ハイイロツツクビ、ムネモンヤツホシなど）で同じ6月とはいえ上旬と中旬の差がかなりみられた。以下にリストアップして若干の説明を加える。

- 1) *Encyclops olivaceus* BATES テツイロハナカミキリ
ca. 30exs., 横手分れ、大神山神社裏のサワフタギに多数訪花。
- 2) *Toxotus minutus reini* HEYDEN モモグロハナカミキリ
4exs., 前年採れた1頭は中部山地産と比較して巨大な個体で *T. amurensis* かと疑われかねないものであったが、今年はその中間の大きさのものがあり、大山産は個体変異に富むようである。
- 3) *Gaurotes doris* BATES カラカネハナカミキリ
- 4) *Lemula decipiens* BATES キバネニセハムシハナカミキリ
- 5) *Lemula nishimurai* SEKI アカイロニセハムシハナカミキリ
6exs., サワフタギに訪花、大山産は京都産よりも大型である。
- 6) *Acmaeops minuta* GEBLER ヒナルリハナカミキリ
- 7) *Pidonia grallatrix* BATES オオヒメハナカミキリ
- 8) *Pidonia muneaka* TAMANUKI ムネアカヒメハナカミキリ
- 9) *Pidonia mutata* BATES ヒメハナカミキリ
- 10) *Pidonia signifera* BATES ナガバヒメハナカミキリ
- 11) *Pidonia simillima* OHBAYASHI et HAYASHI ニセヨコモンヒメハナカミナリ
- 12) *Pidonia amentata* BATES セスジヒメハナカミキリ
- 13) *Pidonia miwai* MATSUSHITA ミワヒメハナカミキリ
- 14) *Pidonia puziloi* SOLSKY フタオビノミハナカミキリ
- 15) *Pidonia debilis* KRAATZ チャイロヒメハナカミキリ
7)～15) は、ゴトウズル、サワフタギに多数訪花。
- 16) *Grammoptera chalybeella* BATES チビハナカミキリ
2exs., 大神山神社裏のサワフタギに訪花。

*第Ⅰ報は 水野；“伯耆大山天牛採集メモ”；すずむし 16 34-36 (1966)

(すずむし、第17巻、第1号、17～19頁、1958年3月)

- 17) *Pyrrhona laeticolor* BATES ヘリウスハナカミキリ
1ex., 寂静山附近のサワフタギに訪花.
- 18) *Anoplodera excavata* BATES ミヤマクロハナカミキリ
- 19) *Anoplodera scotodes* BATES ツヤケシハナカミキリ
- 20) *Leptura aethiops dimorpha* BATES ムネアカクロハナカミキリ
- 21) *Leptura arcuata tsumagurohana* OHBAYASHI ツマグロハナカミキリ
- 22) *Leptura latipennis* MATSUSHITA ハネビロハナカミキリ
3exs., 伐木材に産卵巾を採集.
- 23) *Leptura femoralis* MOTSCHULSKY カタキハナカミキリ
ca. 10exs., 洞明院横のサワフタギに訪花.
- 24) *Strangalomorpha tenuis* SOLSKY アオバホソハナカミキリ
- 25) *Parastrangalis nymphula* BATES ニンフホソハナカミキリ
- 26) *Leptostrangalia hosohana* OHBAYASHI ホソハナカミキリ
- 27) *Allotraeus sphaerioninus* BATES トビイロカミキリ
- 28) *Stenhomalus lighti* GRESSITT トワダムモンメダカカミキリ
1ex., 灌木の叩網.
- 29) *Stenhomalus takaosanus* OHBAYASHI タカオメダカカミキリ
1ex., 洞明院横のサワフタギに訪花.
- 30) *Molorchus kojimai* MATSUSHITA コジマヒゲナガコバネカミキリ
3exs., ゴトウヅルに訪花.
- 31) *Leontium viride* THOMSON ミドリカミキリ
- 32) *Phymatodes albicinctus* BATES シロオビチビヒラタカミキリ 6exs.
- 33) *Phymatodes maaki* KRAATZ アカネカミキリ
4exs., 32) 33) 共にノブドウの叩き網.
- 34) *Hayashiclytus acutivittis* KRAATZ カンボウホソトラカミキリ
1ex., 洞明院横のサワフタギに訪花.
- 35) *Rhaphuma japonica* CHEVROLAT エグリトラカミキリ
- 36) *Demonax transilis* BATES トゲヒゲトラカミキリ
- 37) *Paraclytus excultus* BATES シロトラカミキリ
- 38) *Anaglyptus matsushitai* HAYASHI マツシタトラカミキリ 5exs.
- 39) *Anaglyptus niponensis* BATES トガリバアカネトラカミキリ 4exs.
- 40) *Anaglyptus subfasciatus* PIC キオビトラカミキリ
4exs., 35)~40) はゴトウヅル, サワフタギなどに訪花.
- 41) *Dere thoracica* WHITE ホタルカミキリ
- 42) *Asaperda agapanthina* BATES シテノクロフカミキリ
1ex., クルミの叩網.
- 43) *Asaperda rufipes* BATES キクスイモドキカミキリ
- 44) *Pseudocalamobius japonicus* BATES ドウボソカミキリ

2exs., 枯づるの叩網.

- 45) *Pterolophia* sp. シロオビサビカミキリ
 46) *Mesosella simiola* BATES クワサビカミキリ
 47) *Parechthistatus gibber* BATES ヒメコブヤハズカミキリ
 1ex., 寂静山にて林間をはっていたもの.
 48) *Nanohammus rufescens* BATES クリイロシラホシカミキリ
 3exs., 横手分れの灌木叩網.
- 49) *Xinicotela pardalina* BATES チヤボヒゲナガカミキリ 1ex.
 50) *Uraecha bimaculata* THOMSON ヤハズカミキリ
 51) *Monochamus subfasciatus* BATES ヒメヒゲナガカミキリ
 52) *Doius divaricatus* BATES ドイカミキリ
 53) *Rhopaloscelis bifasciatus* KRAATZ フタオビアラゲカミキリ
 54) *Miccolamia verrucosa* BATES チビコブカミキリ
 ca. 50exs., 寂静山附近のサワフタギの叩網で非常に多数落ちる.
 55) *Graphidessa venata* BATES クモノスモンサビカミキリ
 1ex., 横手道での叩網
 56) *Saperda breuningi* OHBAYASHI プロイニングカミキリ
 1ex., 横手道での叩網
 57) *Eutetrapha ocelota* BATES ヤツメカミキリ 1ex.
 58) *Glenea relicta* PASCOE シラホシカミキリ
 59) *Paraeutetrapha simulans* BATES ダイセンカミキリ
 60) *Oberea hebescens* BATES ヒメリソゴカミキリ
 61) *Eumecocera trivittata* BREUNING セミスジニセリンゴカミキリ
 1ex., 横手道での叩網
 62) *Epiglenea comes* BATES ヨツキボシカミキリ

以上

= おとしふみ =

大山産カミキリムシ2種の記録

1. *Necydalis odai* HAYASHI (1951) ヒゲシロホソコバネカミキリ

1967年7月31日、大山頂上に採集を試みた際、縦走路の一一番端にある天狗が峰付近の灌木葉上より本種1頭を得ました。これは上昇気流に乗って飛んで来たものらしく、同時にオオトラフコガネ、ヒメヒゲナガカミキリなど多数の甲虫も採集しました。

2. *Ceresium holophaeum* BATES (1873) ヨコヤマヒメカミキリ

1964年8月4日、大山寺の旅館(白雲荘)の螢光燈に来ていたものを1頭採集しました。いずれも稀な種であるので報告しておきます。

なお、同定及び御教示下さった青野先生に深謝致します。

(那須 敏)

臥牛山のカミキリムシ

脇 本 浩

(都窪郡清音村)

臥牛山からは非常に珍しいカミキリが採れている。すなわち、1962年に青野氏によりべーツヤサカミキリ、トウキョウトラカミキリが、また今年になって、春日山以外では記録のなかったクビアカモモブトホソカミキリが採れている。その他、筆者は知らないが珍しい種類が採れているのではないかと思う。なぜこのように珍らしいカミキリが採れるのだろうか、青野氏が Vol. 12, No. 2 で指摘されているように、470種という豊富な草木が原始林のままで温存されている事が珍種稀種を生みだしている原因であろう。今後もどんなものが採れるか興味深い所である。

筆者は1965年に1回、1966年に11回臥牛山を訪ずれ5亜科33種を記録したので報告します。

なお、同定、御教示下さった青野氏に心から御礼申し上げます。記録中のミヤマルリハナカミキリはすでにすずむし紙上に発表したものをのせておきます。

PRIONINAE ノコギリカミキリ亜科

1. *Megopis sinica* WHITE ウスバカミキリ
1ex., 3. VIII. 1966; 4exs., 14. VIII. 1966
2. *Prionus insularis* MOTSCHULSKY ノコギリカミキリ
4exs., 2. VII. 1966; 1ex., 27. VIII. 1966

ASEMINAE マルクビカミキリ亜科

3. *Spondylis buprestoides* LINNE クロカミキリ
1ex., 22. VIII. 1966

LEPTURINAE ハナカミキリ亜科

4. *Acmaeops minuta* GEBLER ヒナルリハナカミキリ
1ex., 24. IV. 1966
 5. *Pidonia debilis* KRAATZ チャイロヒメハナカミキリ
5exs., 4. V. 1966; 3exs., 5. VI. 1966
 6. *Omphalodera puzjloii* SOLSKY フタオビノミハナカミキリ
13exs., 4. V. 1966
 7. *Anoplodera azumensis* MATSUSHITA et TAMANUKI ミヤマルリハナカミキリ
1ex., 24. IV. 1966
- 岡山県では他に苫田郡越畠で5月に採れている。
8. *A. rubra succedanea* LEWIS アカハナカミキリ
5exs., 22. VII. 1966; 2exs., 27. VII. 1966

〔すずむし、第17卷、第1号、20~22頁、1968年3月〕

9. *Leptura arcuata tumagurohana* OHBAYASHI ツマグロハナカミキリ
1ex., 27. V. 1966; 1ex., 5. VI. 1966

CERAMBYCINAE カミキリ亜科

10. *Pseudaeoolesthes chrysothrix* BATES キマダラカミキリ
1ex., 27. V. 1966
11. *Molorchus ishiharai* OHBAYASHI カエデヒゲナガコバネカミキリ
6exs., 24. IV. 1966
12. *M. kojimai* MATSUSHITA コジマヒゲナガコバネカミキリ
1ex., 24. IV. 1996
13. *Kurarua rhopalophoroides* HAYASHI クビアカモモブトホソカミキリ
6exs., 27. V. 1966
14. *Rhaphuma diminuta* BATES ヒメクロトラカミキリ
1ex., 24. IV. 1966
15. *Demonax transilis* BATES トゲヒゲトラカミキリ
2exs., 4. V. 1966; 1ex., 27. V. 1966
16. *Anaglyptus niponensis* BATES トガリバアカネトラカミキリ
3exs., 24. IV. 1966

LAMIINAE フトカミキリ亜科

17. *Monochamus subfasciatus* BATES ヒメヒゲナガカミキリ
1ex., 18. VIII. 1965
18. *Uraecha bimaculata* THOMSON ヤハズカミキリ
1ex., 27. VII. 1966
19. *Falsomesosella gracilior* BATES シロオビゴマフカミキリ
12exs., 5. VI. 1966; 1ex., 22. VII. 1966
20. *Mesosa hirsuta* BATES カタジロゴマフカミキリ
1ex., 18. VIII. 1965; 1ex., 14. VIII. 1966
21. *M. longipennis* BATES ナガゴマフカミキリ
6exs., 18. VIII. 1965; 2exs., 27. VII. 1966; 1ex., 3. VIII. 1966; 1ex., 14. VIII. 1966
22. *M. senilis* BATES タテスジゴマフカミキリ
1ex., 27. V. 1966
23. *Apalimna liturata* BATES ヒゲナガゴマフカミキリ
1ex., 14. VIII. 1966 備中地区では初記録ではないかと思う。
24. *Rhodopina lewisi* BATES セミスジカミキリ
1ex., 22. VII. 1966
25. *Pterolophia caudata* BATES トガリシロオビサビカミキリ
7exs., 27. VII. 1966
26. *P. jugosa* BATES ナカシロサビカミキリ
1ex., 27. V. 1966; 2exs., 22. VIII. 1966

27. *P. rigida* BATES アトモンサビカミキリ
1ex., 22. VIII. 1966
28. *P. zonata* BATES アトジロサビカミキリ
3exs., 27. V. 1966
29. *Mesosella simiola* BATES クワサビカミキリ
1ex., 27. V. 1966; 7exs., 5. VI. 1966
30. *Doius divaricata* BATES ドイカミキリ
6exs., 27. V. 1966; 1ex., 5. VI. 1966
31. *Exocentrus galloisi* MATSUSHITA ガロアケシカミキリ
1ex., 3. VIII. 1966; 5exs., 14. VIII. 1966
32. *E. lineatus* BATES アトモンマルケシカミキリ
2exs., 27. VII. 1966; 3exs., 9. VIII. 1966; 2exs., 14. VIII. 1966
33. *Oberea vittata* BLESSIG ホソキリンゴカミキリ
1ex., 5. VI. 1966
-

= おとしふみ =

備中産甲虫雑記 (1)

- 1) *Sandalus segnis* LEWIS クチキクシヒゲムシ

クシヒゲムシ科 *Rhipiceridae* に属する。筆者は1964年5月10日、高梁市臥牛山の原始林中において、頭部に土を付着させた状態で路上を歩行していた本種の1♀を採集し、一見クロガネの足を短くしたようなその特異な形に驚嘆した次第である。体長15mm位で最初はその属する科さえも見当がつかず、シバンムシかコクヌストの一種ではないかなでと思ったりしたが、結局「原色昆虫大図鑑」(北隆館)により本種の♀(図示されているとは触角の形を異にする。)であることを確認した。尚、同図鑑には上翅は通常褐色であるが筆者の採集したものは上翅も黒色である。

- 2) *Figlus binodus* WATERHOUSE チビクワガタ

光沢ある黒色で大體は♂♀共に短く、一見ヒョウタンゴミムシを思わせるようなユニークな形をしたクワガタムシである。高梁市臥牛山における次の2記録があり、共に朽木上で採集されたものである。

1ex., 10. V. 1964 山砥克己採
1ex., 26. VI. 1966 山砥克己採

- 3) *Arthromacra decora* MARSEUL アカガネハムシダマシ

1964年5月3日、新見市井倉野付近で通常銅緑色～赤銅色の部分が完全に青藍色に変わった本種の一個体を得ているので報告しておく。 (山砥司朗)

岡山県内産ゴミムシの採集記録

山 磯 司 朗

(倉敷市栄町606の2)

採集法が比較的地味でかつ同定の困難な種が多い為か本誌誌上においても本科のものに関する記録はわずかにしか見当らないようであるが、筆者はこのうち色彩や斑紋等により識別の容易な *Callistinae*, *Panagaeinae* 及び *Lebiinae* 等を中心に採集し、名前の判明した下記の種を発表する。

尚、同定及び学名には原色日本昆蟲図鑑(保育社), 原色昆蟲大図鑑(北隆館)を使用した。

PTEROSTICHINAE ナガゴミムシ亞科

1. *Trigonotoma lewisi* BATES ルイスナガゴミムシ

倉敷市栄町(灯火飛来) 1ex., 31. VII. 1963

頭部と前背板は赤銅色の金属光沢を有する。

CALLISTINAE アオゴミムシ亞科

Callistini アオゴミムシ族

2. *Macrochlaenites costiger* CHAUDOIR スジアオゴミムシ

倉敷市羽島山, 1ex., 30. VI. 1963

3. *Chlaenius circumdatus xanthopleurus* CHAUDOIR コキベリアオゴミムシ

倉敷市栄町(燈火飛來), 1ex., 6. VII. 1964

4. *Chlaenius spoliatus molchulskyi* ANDREWES ツヤキベリアオゴミムシ

倉敷市栄町(燈火飛來), 1ex., 1963

5. *Chlaenius pallipes* GEBLER アオゴミムシ

倉敷市酒津, 1ex., 20. I. 1963; 倉敷市酒津, 1ex. 9. IV. 1963

倉敷市羽島山, 1ex., 29. III. 1964

6. *Chlaenius circumductus* MORAWITZ キベリアオゴミムシ

倉敷市鶴形山, 1ex., 3. IV. 1963; 倉敷市鶴形山, 1ex., 5. V. 1963

7. *Chlaenius inops* CHAUDOIR ヒメキベリアオゴミムシ

倉敷市酒津, 1ex., 9. IV. 1963; 倉敷市酒津, 1ex., 14. IV. 1963

8. *Chlaenius variicornis* BATES コガシラアオゴミムシ

高梁市玉, 2exs., 1. IX. 1963; 倉敷市酒津, 1ex., 9. IV. 1963

9. *Chlaenius noguchii* BATES ノグチアオゴミムシ

都窪郡清音村, 1ex., 28. XII. 1962; 倉敷市酒津, 2ex., 4. IV. 1963

10. *Callistoides deliciolus* BATES ヒツメアオゴミムシ

新見市草間, 1ex., 23. VI. 1963; 倉敷市羽島山, 1ex., 30. VI. 1963

(すずむし, 第17巻, 第1号, 23~24頁, 1968年3月)

清音村黒田, 1ex., 5. VI. 1965

このほか佐々木良一君が倉敷市浅原において1頭採集しており、また倉敷昆虫館にも鶴形山産の標本が展示されている。本種は体長11mm位の美麗種で原色日本昆虫図鑑によると「丘陵地や低山地の比較的乾燥した所に棲息し、普通はあまり多くない。」とあり、県内においても上に記したように、いずれも台地、丘陵地等から得られている。

11. *Callistoides pericallus* REDTENBACHER オオサカアオゴミムシ

倉敷市酒津, 1ex., 4. IV. 1963

前種近縁の美麗種で体長12mm。高梁川東岸において前種とは対照的に泥地の石下より得た。図鑑によると「近畿地方には非常に少く東京近郊にはかなり多い。」とあるが当地でもその後採集できず、かなり少ないものと思われる。

Oodini トックリゴミムシ族

12. *Oodes virens* WIEDEMANN オオヒラタトックリゴミムシ

倉敷市栄町（燈火飛来), 1ex., 19. VII. 1963

一見マルガタゴミムシの類に似た特異な種である。体長12mmで全体黒色。

PANAGAEINAE ヨツボシゴミムシ亜科

13. *Panagaeus japonicus* CHAUDOIR ヨツボシゴミムシ

新見市井倉, 1ex., 28. VI. 1964

14. *Dischissus mirandus* BATES オオヨツボシゴミムシ

倉敷市（燈火飛来), 1ex., 17. VI. 1962

LEBIINAE アトキリゴミムシ亜科

15. *Lachnolebia cribricollis* MORAWITZ キクビアオアトキリゴミムシ

倉敷市羽島山, 1ex., 30. VI. 1963; 倉敷市羽島山, 2exs., 29. III. 1964

16. *Lebia calycophora* SCHMIDT-GOEBEL ヒメアトキリゴミムシ

新見市井倉, 1ex., 3. V. 1964

17. *Lebia bifenestrata* MORAWITZ フタホシヒメアトキリゴミムシ

成羽町羽山, 1ex., 17. V. 1964

18. *Parena monostigma* BATES ヒツメアトキリゴミムシ

昭和町美袋, 1ex., 5. V. 1965

DRYPTINAE ホソゴミムシ亜科

19. *Drypta japonica* BATES アオヘリホソゴミムシ

倉敷市（燈火飛来), 1ex., 17. VII. 1963

20. *Galeritella japonica* BATES オオクビボソゴミムシ

成羽町羽山, 1ex. 17. V. 1964

尚、標本はないが *Chlaenius* 属のものでは上記のほか、アトボシアオゴミ、キボシアオゴミ、アトワアオゴミ、オオアトボシアオゴミ、ムナビロアオゴミ等も採集あるいは目撃したことがあり *Lebiinae* もまだ多くの種が記録できるものと思う。

西大寺産カミキリムシの記録について

那 須 敏

(西大寺市西大寺1461)

私が西大寺市で採集し、今まであまり採れていないと思われる種を発表します。

1. *Arhopalus rusticus* LINNE ムナクボサビカミキリ
27. VI. 1966, 水源池(燈火飛来)
2. *Leptura (s. str.) arcuata tsumagurohana* OHBAYASHI ツマグロハナカミキリ
5. VI. 1965, 芥子山, キスジトラカミキリと一緒にハンノキの枯木中で採れたもの.
3. *Semanotus japonicus* LACORDAIRE スギカミキリ
?. V. 1963, 旭町; 2. V. 1965, 今町(死個体で)
4. *Stenygrinum quadrinotatum* BATES ヨツボシカミキリ
4. VIII. 1965, 宿(燈火にて水内採集)
5. *Palaeocallidium rufipenne* MOTSCHULSKY ヒメスギカミキリ
19. IV. 1964, 金岡; 7. IV. 1666, 市内(藤原採集)
3月末から4月にかけて割合多く飛翔中のものが採集できる.
6. *Clytus melaenus* BATES シラケトラカミキリ
2. V. 1966, 西大寺高校内
7. *Psacothea hilaris* PASCOE キボシカミキリ
?. VI. 1962, 元町
8. *Uraecha bimaculata* THOMSON ヤハズカミキリ
10. VI. 1963, 芥子山; 5. VI. 1965, 芥子山(木村採集)
9. *Monochamus alternatus* HOPE マツノマダラカミキリ
29. V. 1964, 掛元町(燈火にて); 12. VII. 1966, 今町
10. *Mesosa hirsuta* BATES カタジロゴマフカミキリ
?. VII. 1961, 西大寺小学校内, かつて金山のサクラの木で数頭とったことがある.
11. *Olenecamptus octopustulatus formosanus* PIC クカサゴシロカミキリ
9. VII. 1966, 水源池(燈火にて)
12. *Pterolophia annulata* CHEVROLAT ワモンサビカミキリ
15. IX. 1964, 河本橋(燈火にて); 6. X. 1966, 水源池(燈火にて)
本種は6月と9月(特に9月)頃河本橋の夜間採集の際割合多く採れる.
今町で探ったものの内薪の倉庫があるため, その薪についてきたと思われるものを
3種あげておきます.
 1. ピロウドカミキリ, 9. VII. 1965, 燈火にて
 2. セミスジカミキリ, ?. VI. 1962
 3. ナカシロサビカミキリ, ?. VI. 1963

以上の他に標本はありませんが, センノカミキリを夏休み中に芥子山(松崎)で数頭,
クビアカトラカミキリ(ブドウトラカミキリかもしれない。)を今町にて, アサガオの葉
上及び飛翔中のものをあわせて3頭, 夏休み中に採集したことがあります. なお西大寺高
校内の標本中に, トガリシロオビカミキリがあるのでつけ加えておきます.

岡山県未記録の蛾について

赤 枝 一 弘

(西大寺市中野広井北浦734の4)

岡山県未記録の蛾については本誌100号 記念号に道信氏、榎本氏が発表され、筆者の採集品も大部分は榎本氏によって発表されたがその時もれた種、及びその後判明した種をここに発表する。

1. *Dryobotodes intermissa* BUTLER ナカオビキリガ
10. XI. 1966, 西大寺市水源池, 近県では広島, 香川で記録されている.
2. *Cosmia sanguinea* SUGI ヒイロキリガ
20. VII. 1966, 真庭郡湯原, 近県では記録されている.
3. *Leucania salebrosa* BUTLER オオスジシロキヨトウ
19. VIII. 1966, 新見市井倉; 25. VIII. 1966, 西大寺市水源池, 広島, 兵庫, で記録されている.
4. *Hypocala moorei* BUTLER ムーアキシタヤガ
16. X. 1966, 西大寺市河本橋, 那須採集, 近県では兵庫県で記録されているのみ, 標本の提供を受けた那須氏に感謝いたします.
5. *Pseudalelimma miwai* INOUE オオキイロアツバ
19. VI. 1966, 新見市井倉, 本種についてはすでに他誌へも発表したが, 本種は最近井上寛氏により新属新種として発表されたもので, 従来三重県の鈴鹿山脈のみが産地として知られていた. 本種の採集には偶然伯備線で那須君と会い, 二人共草間方面をねらう予定であったので合流した. 当日は井倉駅のあたりから昨夜飛來した蛾が相当おり, 道べりの電柱にまでモンホソバスズメとか, ヒトリの類がとまっており, 昨夜の蛾の活動がはげしかったことがしのばれた. さらに井倉から草間への分れ道の水銀燈下の草むらにわんさと蛾が集まっており, ここでまずめぼしいものを手づかみにし, 後をスイーピングで採りまくったが, この中に2頭の本種が含まれていた. かなり大型で, 全体が黄色でこれといった班紋もなく, 一見シャクガのような感じのする本種は2人共首をかしげ, 長い間正体が分らなかつたが, 榎本氏がまず「鈴鹿山脈の昆虫」に出ていた種ではないか, と気付いて正体が分つたわけである.
6. *petelia albifrontaria* LEECH シロズエダシャク
27. IV. 1966, 真庭郡湯原町, 近県では兵庫県で記録されている.

岡山県のガロアムシについて

小野 洋・青野孝昭・宇野弘之

近藤光宏・重井 博

(倉敷昆虫館)

Records of *Galloisiana* sp. from Okayama prefecture

ガロアムシ類は、Orthoptera の Grylloblattidae ガロアムシ科に属する種類で、甚だ原始的な形態を残しており、古生代石炭紀に初めて地球上に出現した昆虫とされているゴキブリ系統のものとしてあまねく認められ、現在においては Orthoptera-Saltatoria 跳躍直翅目の祖先型または汎直翅類と汎網翅類との共通祖先型から分化したものと考えられ（江崎、1937），その系統的な位置を Gryllidae コオロギ科と Blattidae ゴキブリ科の間におかれて、化石昆虫的な意味での、形態学、生理生態学その他諸分野における研究材料として貴重な存在であることは、衆知のところである。

Galloisiana nipponensis CAUDELL et KING ガロアムシは、1915年（大正4年）在日フランス総領事ガロア氏が日光の中禅寺湖畔から最初に記録し、1924年記載されたが、その後中部、関東の各地からぞくぞく発見され、更に京都附近、九州、四国、中国、最近では東北と極めて局地的ではあるが、分布記録は広がってきた。

近年 *G. nipponensis* から *G. yuasai* ヒメガロアムシと *G. kiyosawai* エゾガロアムシの2種が分離され（朝比奈、1959），北海道からも *G. yezoensis* エゾガロアムシが記録され（朝比奈、1961）て、かつて九州から記録された *Ishiana notabilis* (SILV., 1927) を加えるとすれば、日本産ガロアムシ科は5種になる。アメリカ、カナダに跨がるロッキー山脈の *Grylloblatta* 属4種とソ連ウスリー地方の *Grylloblattina* 属1種を加えて現在世界では10種が記録されることになる。

さて、岡山県下では、1956年に高知女子大学の石川重治郎氏が、上房郡北房町井殿の備中鐘乳穴（カナチアナ）から記録したものを *Grylloblatta* sp. として報告した（石川、1955）のが最初のようである。翌1957年その時同行した清心女子大学の佐藤清明氏のご依頼があり、同氏指導のもとに、当地で、青野、近藤、小野は3日間にわたって精査したが、遂に発見に至らなかった。現在もなお、これが日本産既知種のどれであったかは不詳である。その後、県下では永らく記録がなかった。

筆者等は1967年8月27日、新見市で、*Galloisiana* sp. を発見し、若干の観察を行う機会を得た。

生息地の環境は、石灰岩地帯で、ドリーネ状の谷底に鐘乳洞が開口、その洞口附近はかなり急な傾斜をなして礫がたいせきし、腐植土と混り合って必要な環境要素を保っているようである。また、この深く落ち込んだ地形と、周囲に繁茂する豊富な植物群落、殊にアカマツや多くの広葉樹林の為に直射日光は、一日中さえぎられており、微気象的にも常に高湿低温の状態が保たれているようで、これは福島（1966）が述べている秩父地方における *Galloisiana* の生息環境の条件にかなり一致するものがある。そこで当日、本種を目当てに詳しく調べたところ、ほぼ15m²の範囲に限られた石下から、近藤を始め全部で6exs. を発見することができた。その中2♂♂を研究資料として、生きた状態で持帰る



石下で発見したガロアムシ
(Aug. 27, '67, 新見市の生育地で
撮影、小野)

ている。なお本種が樹上に昇る習性については、早くから知られており、既に1925年に小仏峰で平山修次郎氏が、ビーティングにより採集したことについての報告（矢野、1927）があるし、朝比奈（1929）はシロアリで97日間飼育を続けている。

本県産の今回持帰ったものは、体長15mmと8mmで乳白色、大型の方は幾分褐色を帯びてはいるが、いずれも幼虫である。朝比奈正二郎氏からの私信によれば、*Galloisiana* sp.にはまちがいないが、幼虫の形態による分類や命名は目下不可能であって、恐らく将来もほとんど見込みがないことである。ともあれ、中国地方では山口についての記録である。今後成虫の採集による種名の決定と、新しい生息地の調査、更に生息が確認されたので、生態研究などをすすめていきたいものである。

末筆ながら、ご懇切なるご指導と文献をご恵与いただいた国立予防衛生研究所、朝比奈正二郎氏、平素から一方ならぬご指導をいただき、沢山の文献に目を通す機会を与られ、紹介の労をとられた岡山大学農業生物研究所、安江安宣氏、多年にわたりご指導をいただいているノートルダム清心女子大学、佐藤清明氏に深甚なる謝意を表する次第である。

引　用　文　獻

- 朝比奈正二郎（1929）ガロアムシの食餌、昆虫、3：195.
 Asahina, S. (1959) Description of two new *Grylloblattidae* from Japan, Kontyu, 27: 249-252,
 ——— (1961) A new *Galloisiana* from Hokkaido, Kontyu, 29: 85-87.
 江崎悌三（1931）昆蟲類（系統学）、東京、岩波書店、65pp. esp. pp. 9-37.
 Ford, N. (1926) On the behavior of *Grylloblatta*, Can. Ent., 58: 66-70.
 久内清孝（1940）ガロアムシ採集の昔話、採集と飼育、2(2): 48-50.
 福島義一（1965）ガロアムシの採集と飼育、遺伝、19(4): 76-79.
 ——— (1946) 秩父産ガロアムシに関する研究、秩父自然科学博物館研究報告、13: 31-38.
 矢野宗幹（1927）ガロアムシ樹上に昇る習性あるか、昆虫、2: 111.

べく努力したが、直射日光にさらすという不手際も手伝って、車のクーラーで冷し続け、夜も室内で10°C以下を保ったが、結局は斃死した。

ガロアムシ類の生態については、未だまとまった業績は少いが、*Grilloblatta campodeiformis* E. WALKについて、トロント大学の Ford (1926) は、飼育により、せっ食、交尾、産卵に至る行動の詳しい観察を報告しており、その環境温度については、好適範囲を0°Cを数度上まわる程度と思われると述べており、日本産のものに比較して、より好低温性のようである。

日本産のものについては最近福島（1966）の報告があり、飼育実験により *Galloisiana* が肉食性で、クモ類、トビケラ、シロアリの成虫などを食し、穿孔性、反光性、走触性、好湿性などを示し、更に生活の最適温度範囲が、ほぼ20°C以下と考えられることを指摘し

台 湾 蝶 土 産

水 野 弘 造

筆者の弟、水野道男（宇部市在住、宇部興産勤務）は1966年8月下旬から12月上旬の間、社用で台湾に出張した。昆蟲の捕獲を依頼しておいたところ蝶の採集を行い、下記の通り86種 280頭の蝶を持ち帰った。素人の採集品であるから破損品もかなりあり、アゲハ、マダラ、タテハなどの大型種がその大部分を占めていて珍品といえるものは無いが日本の蝶と比較して熱帯色豊かで私への土産としては充分なものと言える。採集地は花蓮市 (Hualien)，を中心として、太魯閣 (Taroko)，三棧 (Santsien)，鯉魚潭 (Liitan)，などの太平洋側低地帯のみで、期間が9月～11月であるため比較的種類数が限られている。山地帯に入るには許可証を必要とし、手続きが不明で入り得なかったとの弁解がついている。目撃したが採集できなかった種ではっきりと種名のわかるものにコノハチョウとホッポアゲハの2種があるといい、又シジミ、セセリは多数目撃できるが飛翔敏捷のためと判別困難のため、採集を自論まなかった由、残念であった。なお蝶以外の昆蟲は1頭も採っていないかった。蛾は非常に多いようである。

採 集 品 目 錄 (学名を省略する)

◆ アゲハチョウ科 (17種 99頭)

キシタアゲハ	10exs. (6♂ 4♀)
オオベニモンアゲハ	9exs.
タイワンジャコウアゲハ	6exs.
ベニモンアゲハ	3exs.
アオスジアゲハ	4exs.
タイワンタイマイ	2exs.
ミカドアゲハ	3exs.
オナシアゲハ	6exs.
シロオビアゲハ	14exs. (8♂ 6♀)
クロアゲハ (無尾型)	6exs.
モンキアゲハ	2exs.
タイワンモンキアゲハ	2exs.
オナシモンキアゲハ	2exs.
ワタナベアゲハ	4exs. (2♂ 2♀)
ナガサキアゲハ	9exs. (4♂ 5♀)
カラスアゲハ	16exs.
ルリモンアゲハ	1ex.
◆ シロチョウ科 (10種 36頭)	
クロテンシロチョウ	2exs.
アカネシロチョウ	6exs. (4♂ 2♀)
タイワンモンシロチョウ	1ex. (?)
タイワンシロチョウ	3exs. (2♂ 1♀)
ツマベニチョウ	8exs. (7♂ 1♀)
ウラナミシロチョウ	4exs. (2♂ 2♀)
ムモンウスキチョウ	2exs. (♂)
タイワンヤマキチョウ	2exs. (♀)
キチョウ	3exs. (?)
◆ マダラチョウ科 (8種 25頭)	
カバマダラ	1ex.
スジグロカバマダラ	5exs.
コモニアサギマダラ	4exs.
リュウキュウアサギマダラ	4exs.
ヒメコモニアサギマダラ	2exs.
ツマムラサキマダラ	4exs. (?)

ホリシャルリマダラ	3exs. (♀)	ヒメフタオチョウ	1ex.
マルバネルリマダラ	2exs. (1♂1♀)	◆ シジミチョウ科 (18種, 27頭)	
◆ ジャノメチョウ科 (6種, 20頭)		アサクラシジミ	1ex. (♀)
コウラナミジャノメ	1ex.	ムラサキシジミ	1ex. (♀)
タイワンウラナミジャノメ	1ex.	エグリシジミ	1ex.
マルバヒトツメジャノメ	1ex.	ヒイロシジミ	1ex.
ウスイロコノマチョウ	7exs.	タイワンフタオツバメ	1ex.
シロスジマダラ	3exs.	ミツボシフタオツバメ	1ex.
ルリモンジャノメ	7exs.	ゴイシシジミ	1ex.
◆ タテハチョウ科 (20種, 62頭)		カクモンシジミ	3exs. (♂)
カバタテハ	5exs.	ウラナミシジミ	1ex. (♂)
タイワンキマダラ	2exs.	オナガウラナミシジミ	1ex. (♂)
ツマグロヒヨウモン	2exs. (♂)	ルリウラナミシジミ	4exs. (1♂3♀)
タテハモドキ	4exs.	アマミウラナミシジミ	1ex. (♂)
ジャノメタテハモドキ	1ex.	ホリイコシジミ	1ex. (♂)
クロタテハモドキ	1ex.	タイワンコシジミ	2exs. (♂)
アカタテハ	2exs.	ヤマトシジミ	4exs. (3♂1♀)
ルリタテハ	1ex.	ヒメウラボシシジミ	1ex.
キミスジ	3exs.	タイワンルリシジミ	1ex. (♀)
メスアカムラサキ	7exs. (5♂2♀)	クイワンクロボシシジミ	1ex.
リュウキュウムラサキ	11exs. (6♂5♀)	◆ セセリチョウ科 (7種, 11頭)	
リュウキュウミスジ	6exs.	タイワンアオバセセリ	1ex.
タイワンミスジ	1ex.	アオバセセリ	1ex.
タイワンホシミスジ	1ex.	オオシロモンセセリ	2exs.
シロミスジ	4exs.	クロボシセセリ	2exs.
ヤエヤマイチモンジ	5exs. (2♂3♀)	ネッタイアカセセリ	2exs.
タイワンイチモンジ	2exs. (♀)	ヒメイチモンジセセリ	2exs.
イシガケチョウ	2exs.	トガリチャバネセセリ	1ex.
ヒヨウマダラ	1ex.		

以上、種名判定には、白水 隆： 原色台湾蝶類大図鑑（1960. 保育社）を使用した。なおキチョウとタイワンキチョウの中に老朽個体がかなりあって頭数が若干移動するかもしれないの？を付した。ナガサキアゲハ 5♀のうち有尾型は 2exs. 無尾型が 3exs. シロオビアゲハ 6♀のうち 第Ⅰ型（雄の模様）は 1exs. 残り 5exs. が第Ⅱ型（赤色斑が多い）であった。

Maddester 雜 言 錄 (6)

水 野 弘 造

“私の標本箱から” (その1)

本誌 Vol. 12, No. 4 に掲載された赤枝一弘氏「私の標本箱から」にならって、以下私の標本箱にある虫について maddesta 流解説を行う。

(1) マエグロノメイガ *Cataprosopus monstrosus* BUTLER

1ex.,	30.	VII.	1965	静岡県二軒小屋
1ex.,	27.	VII.	1966	徳島県劍山
1ex.,	7.	VIII.	1966	鳥取県大山 (いずれも水野採集)

学名の示す通り怪物である。私が採ったのは昨年南アルプス二軒小屋の電灯に来た奴が最初であった。まず採った時からしてノメイガなどとは夢にも思わず、てっきりアツバとばかり思い込んでしまったのが間違いの始り。図鑑をくってみても一向に種名が判明しないのも道理である。しかしそこはそれ希望的観測という甘い夢にとりつかれて、もしや新種ではあるまいか、新記録ではなかろうかとばかりに同僚をだまくらかしてカラーフィルムを4~5枚無駄に使わせたものだった。ところが専門家に送付すべきカラーフィルムが出来上る前に書店でみつけた東正雄著“京阪神の動物(六月社)”なる本をペラペラやって驚いたではないか。ちゃんと23頁に写真入りでまぎれもない同一物が掲載されている。しかも学名はおろか和名さえも明記されて、フィルムの出来上りがもう一週間早かったらとんでもない大恥をかくところだった。何のことはない図鑑にもノメイガの所にはちゃんと出ていたのである。

それでも「山地に出現するが多くない」の解説に少しばかり気を持ち直したのも束の間、今年に入ってから四国劍山で灯をつければ飛んでくる。大山横手道の便所の壁についているのを採る。わずか2年程の間に3匹も集ってしまっては全く普通種以上の何物でもない。しかしながら私が自分の昆虫標本を写真に撮ったのは、ウラギンスジヒョウモンの雌雄型*) を撮した中学生時代以来の出来事であるから、これ程に人を興奮させることでのきた蛾はやはり“怪物”といわねばならない。

*) ウラギンスジヒョウモン雌雄型

Argyronome laodice japonica MÉNÉTRIÈS (gynandromorpha)

13. VI. 1951 岡山県総社 (水野採集: 本誌 Vol. 1, No. 8 参照)

(2) オニホソコバネカミキリ *Necydalis gigantea* KANO

6exs., 16~17. VII. 1966 群馬県大沢 (水野採集)

カミキリ屋ならば是非とも手にしたいのが *Necydalis*, 中でも一段と魅力あるのが, *gigantea*, 名前からして身ぶるいするではないか。貯金をおろし, にがい顔の上役に有給休暇届けを出して3泊4日, 往復新幹線超特急の過密プランに従って出発したのが7月15日夜, 奥日光は大沢の木賃宿で3♂3♀の収獲に気を良くしての祝杯を上げたのが17日夜, 18日は丸沼菅沼から金精峠を越え中禅寺湖から戦場ヶ原を通って日光市から特急電車, 夜11時には京都に帰着。副産物シロオビドイカミキリ 5exs., ヒメマルクビヒラタ 1ex., ニ

ツボンハイイロハナ 1ex., シラネヒメハナ 2exs., マルモンサビ 2exs., ニイジマチビ 2exs., ハネビロハナ 1ex., という成果であってみれば、オニホソコバネの思い出の悪かろう筈がないではないか。こううまく事が運んだのも京浜同好会の中村俊彦氏の案内と、自動車に便乗させていただいた衣笠、新井両氏の御好意とによるのである。それはさておき、*Necydalis* については「昆蟲と自然 Vol. 1, No. 5」に草間氏の解説があるので他言を要しないが、あまりにもうまく擬態したハチの姿、飛ぶ恰好、つかまえた時いかにも射すぞとばかりに尻をふり上げる動作に、それは聞いてはいたものの驚きの声を禁じえなかつた。「何故、桑の木に居るカミキリはトラフカミキリといい、オニホソコバネといい。こうもハチに似なければならぬのだろう」と思わず発した愚問に中村氏は黙笑して答えなかつたが、後日同氏と四国梶ヶ森にてイツシキキモソカミキリ*）を追つたのも桑畠の中であったことは、桑の木とハチの姿との関連性についての体験的解答であったのかもしれない。

*）イツシキキモソカミキリ

Glenea centroguttata FAIRMAIRE

5exs., 29. VII. 1966 高知県高根ヶ森 (水野採集)

(3) ヤノコモンタマムシ *Poecilonota yanoi* Y. KUROSAWA

1ex., VI. 1956 奈良市春日山 (M. Ito 採集)

ともかくも珍品同志だから食うか食われるかの瀬戸際だったのが丁度一昔前の1956年秋の話。私の大山で採ったエサキキンヘリタマムシ 3exs.*）をもって行かれるか、春日琉璃氏所蔵のトゲフタオタマムシ 1ex., を引っこ抜いてくるかで、私が琉璃氏のレパートリーからタマムシが消えることになったのである。ところが二人共強情だから何とか蚊とか言って仲々渡そうとはしない。結局5年も経つてから完全に生態屋に転向した琉璃氏の負けが判明し、トゲフタオはクソムシを除く他のもろもろの甲虫共と一緒に私の標本箱へ嫁入りして来た。ところが“これは世にも珍らしいトゲフタオなんだぞ”とばかりに念を押されては疑いをかけようにも不可能というもの。図鑑にも春日山に産することは明記されていることではあるし、爾来5年間私はトゲフタオの所有者であることに満足していた。

しかし知識は広く求めるもの、今秋日本甲虫学会の後藤光男氏宅を訪問するや思いがけずも春日山産正直トゲフタオ（江崎三雄氏採集）に出合わしたのである。一見してそれは本物のトゲフタオであり、私の秘蔵するのはにせ物だというのがピンときた。何とも釈然としない気分で帰宅した私は早速標本箱をとり出し、図鑑と首っぴきで調べ始めたのも当然であろう。ところで更に驚くべきことには、何とそれは、トゲフタオの3つ隣のヤノコモンタマの記載に一致するではないか。“三重県でただ一頭採集されただけである”と。つまり世界で2頭目のしかも完全標本だったのである。今頃春日琉璃氏は「おれは未だ世界で30匹も採れていないトゲフタオを水野に呉れてやったんだぞ。」といぼっているかもしれない。更に面白いのは採集者の M. Ito 氏とはいかなる人物か私は一面識もないことで採集御当人は今時分はおそらくそんな虫を探ったことすら忘れてしまっているのではないかということである。

*）エサキキンヘリタマムシ

Scintillatrix kamikochiana OBENBERGER

3exs., 11. VII. 1956 烏取県大山 (水野採集)

倉敷昆虫同好会顧問

深 谷 昌 次 先生
石 原 保 先生
小 泉 憲 治 先生
安 江 安 宣 先生
佐 藤 清 明 先生
杉 山 章 平 先生
白 水 隆 博 先生
重 井 博 先生

医療法人

重井病院

倉敷市幸町 TEL(22)3655

すずむし Vol. 17, No. 1, March 31, 1968

倉敷昆虫同好会発行

連絡事務所 倉敷市幸町（倉敷昆虫館内）
本部（倉敷市住吉町岡山大学大原農業生物研究所内）